の豫定より二十日ばかり後れて出發するに決したのは、奉公の至誠に出でたとはいへ、よく／＼の事であつたに相違ない。余輩は彼れの詐らざる告白に依つて、其腹藏なき意中を聞き、主將の用意左こそと願かるゝと共に、彼れの晩年の言行を通じて見るやうに、こゝにも亦表面豪放の裡、一種の悲哀の感に打たれざるを得ぬ。

太閤の書狀は未だ舊史に引用されたのを見當らぬが只林道春の豊臣秀吉譜に

九月大廳之忌服終之後、秀吉又赴名護屋。此時勅使來曰、渡海之事以可留之、秀吉復命曰、勅命固辱、然遣多兵於朝鮮、軍雖既勝、而大明之大兵若爲援勢、則勝

敗猶難知而已、吾身在本朝、何座指揮萬里之外之爲哉、非背勅旨、唯速攻平大明朝鮮、而耀我朝之兵威耳、勅使歸而奏之、帝有恩嗔、

と書いて居り、繪本太閤記などにもそれと同じ意味を敷衍されて居る。此勅使御差遣の時期からいへば、是時の事を指して居るやうにも見ゆるが、所謂渡海は朝鮮への渡航の事の様であつて一體の文意も太閤の書狀とは大に相違があり、特に敬虔の態度を缺いて居るのが目立つて見ゆるのは到底此書狀を見たものと解することが出来ぬ。然らば此書狀は舊史の遺漏を補ふ爲めにも亦貴重の史料たるを失はぬものである。

スズン・ヘヂンのヒンデンブルグ評

文學博士 藤代禎輔抄譯

(一)

第一にヒンデンブルグの特色として特筆すべきは、彼が露國戰役の際平時の習慣を殆んど全く改めなかつた事である。彼の勉強、散歩、飲食、睡眠の時間は平時と同じ刻限、同じ長さである。彼は習慣に於ても、平靜に於ても毫も擾さるゝ所がない。一旦我意に適し、我爲めになり、我性に合つた物には中々執着が強い。

戦時でも平時でも朝飯後直に仕事に取掛る。夏は六時に起き、冬は一時間遅い。仕事は十一時頃迄続く。それから晴雨を論せず、季節を問はず、タツプリ散歩する、是も現在の戦時と以前の平時と異なる所がない。私は二三度彼が有蓋自動車で副官と一所に、閑靜な森の中で多少路らしい路を乗廻す爲め、郊外に乗出す所を見たことがある。一時前五分に歸つて、正一時に始まる午餐の食卓に就く用意をする。此時間の嚴守は時計を調整する

標準としても宜い位だ。食事は質素で、其際モゼル葡萄酒を一杯傾ける。

午餐の食卓を離れると直に階上の室に上り休息する。四時には仕事に掛り、八時數分前まで續ける。平時には四時頃家族團樂して所謂小食事の菓子と珈琲とを取る。それから訪問客に接した後、都合次第家族と外出し、又は勉強する。食卓に客を喜ぶことは出陣中も相變らずで、好んで談笑し焦眉の時事問題にまで論及する。

正八時に晚餐を喫し麥酒を傾けながら十一時頃まで談ずる。毎日毎日此順序に毫も狂ひがない。戦争がヒンデンブルグの生活振を變へることが出来ないと同じく、戦争の艱難と世界史上重大なる出來事とは彼の非凡なる元氣を攪き擾すことが出來なかつた。二月初マズール地方の惡戰時代も今も彼は毫も變りがない。一九一四年十二月シエツフェルとリッツマンなどが露人からロツヂユの東方

で包圍せられて絶望的と思はれ人心恟々たりし時
も、ヒンデンブルグは其平靜を失はず、人々不安
の極に達した際も午餐の卓上に供へられた見事な
パイは何所から到來したのかと尋ねた。此パイは
若き少尉の母親から送つて來たもので、其母親は
特別の謝状を受けた。一見包圍中に陥つた軍團は
司令官の期待に背かざる冷靜の果斷を以て突破し
剩へ一萬二千の俘虜を得た。斯くの如き元帥の沈
着は蓋し大部分自然の賜であらう。併し又至重の
責任を負ふ様教育せられた結果で、此點に於て獨
逸の將校は頭初より訓練せられるのである。

ヒンデンブルグは兵士の神である。これ勝利が
此元帥の采配次第であるからである。兵士は彼の
名を聞くだけで、至大の努力に鼓舞せられ、彼が
爲めには熱誠を以て死地に赴く。我英雄は又軍隊
の父であり、何等かの道を以て彼等に幸福を得し
むる様腐心して居る。

ヒンデンブルグと參謀長との間柄は感ずるに餘
りあるもので、兩人の結託を解くは唯死あるのみ。
作戰計畫を立つるは元帥であるか、參謀長である
かとは往々問題となるが、彼等は一以て他を補ふ
ものと信せざるを得ない。けれども責任の重荷は
獨り主將のみ之を負擔する。司令官と參謀長とは
友人間の情誼のみか、好果を結ぶ共同作業に因り
ても切ても切れぬ仲となつて居る。兩將軍の語り
合ふ様を見ると、犯すべからざる威服の感に打た
れる。「未來の統帥」とは元帥がルデンドルフに興
た名で、ル氏が其上官を如何に見て居るかは、東
部戰場に於ける何人も熟知の事である。普魯士の
ヨアヒム親王が曾てヒンデンブルグの駟馬に書送
つた言葉は、全軍隊がタンチンベルグの戦勝者に
對して懐ける感情の表明と見られる。其言葉に「予
の怯懦ならぬは卿の知る所なれども、ヒンデンブ
ルグの爲ならば打殺さるゝとも厭はじ」と

ヒンデンブルグの記憶は非凡である。四歳から七歳までポーゼン州のビンチに住んだことがある。彼の父は其地の歩兵第五十六聯隊附であつた。丁度新會堂が建てられたが、幼ヒンデンブルグは父と一所に折々其會堂に出掛けた。現戰爭で元帥が司令部をポーゼン市に置いた時ビンチの會堂を訪問して、這入ると直に「以前は腰掛が祭壇からズツト離れて居た」と言た。牧師は其言の正確なるを證認した。教區の増大に連れて、二三年前腰掛の列を内陣の方へ若干進めたのである。所が元帥が前に此會堂を見てから丸六十年立つて居るのだ。

一八六六年春ヒンデンブルグは士官候補團を去つて將校となつた。證明書には選拔生即ち「特に將校たるに適する者」と云ふ名稱を受けた。

同年の戰役には近衛歩兵第三聯隊に服役した。若き少尉はケーニヒグレーツの戰に敵の砲臺を強

襲する際勳功を樹てた。鎗は射落され彼自身も負傷した。戰爭終了後ハノーエルに赴き、爾來特に此市を好く様になつた。

一八七〇年ヒンデンブルグは先づ聯隊副官となり、次いで聯隊給養委員となる。此資格を以て一八七一年一月十八日エルサイユに於ける誓忠式の時聯隊を代表した。併しエルナル畫伯の名畫には蓋の尖頭が見ゆるばかりだ。

戰後三年間陸軍大學校に入り、後參謀本部勤務となる。一八七九年シテツチーンに轉任し、フォン、シベルリング大將の娘ゲルトルウド、ホルヘルミーチ嬢と結婚した。シベルリング家は瑞典にも知名の軍人を供給した家柄だ。此結婚は異常に仕合はせなものとあつた。

ケーニヒスベルグ及フラウシタットに歷任の後再び參謀本部附として伯林に歸り、同時に陸軍大學校の戰術學教官となつた。一時陸軍省の部長と

して勤務した後、一八九一年オルデンブルグ聯隊に赴任し、二年後コブレンツ第八軍團長バーデン大公爵世子の參謀長となり、一九〇〇年第二十八歩兵師團長としてカルスルーへに轉任した。

此頃マイン河畔フランクフルト市の陪席判事B氏がヒンデンブルグ家と親しくなつた。Bはヒンデンブルグの長女と瑞西國四林湖畔のブルンチンに於て知合になり我意中の人とした。結婚式は一九〇二年カルスルーへの宮室禮拜堂に於て舉行せられ、大公爵夫人ルイーゼの臨場を辱うした。

一九〇三年春大將はマグデブルグの第四軍團長に補せられ、八年間此職を保有した。此軍團の管轄内にライプチヒ附近のリユツツェンと云ふ一小市があつた。一九〇七年十一月六日此地のグスターフ、アドルフ禮拜堂の獻堂式に臨場せる獨逸人中第一列に皇帝の名代アイテル、フリードリヒ親王の次に歩兵大將フオン、ベチツケンドルフと、

フオン・ヒンブルグとを見た。一九一一年ハノーエルに於て退職級に入り現役を解かれた。翌年第二女をリユーネブルグ出身のハノーエル乗馬學校長P氏に嫁じた。氏は現時第十豫備隊の傳令將校である。

之に次ぐハノーエルに於ける閑散なる數年間、ヒンデンブルグは戰史の研究と政治及び軍事に關する記録の涉獵とを事とした。又彼一家の歴史を調べ、其餘は家族と別懇な友人の小範圍とに身を任せた。此選り拔きの友人に數へられた人々は、舊師でもあり上官でもあつて近頃物故せる元師フオン、ボツク、フオン、ポラハ、教務大臣フオン、シツツト及當時の歩兵大將にして現に元帥たるフオシ、ビユウロー等である。

ヒンデンブルグは骨牌を弄ばない。折々バチアンス(と云ふ一人限りで出来る骨牌遊)をするか、またはハルマを一番位指す。音樂に對してはこれと云ふ趣味も持たないが、軍樂の勇壯活潑な調子

を喜ぶ。本當に好い詩や、美術的の手際を見せた
畫ならば大に之を貴ぶ。劇場には滅多に顔を見せ
ぬ。佛語は流暢に話すが、英國最負ではない。

旅行には可成り時を費した。退職後間もなく數
月間以太利を見物し、後には屢々西普魯西のフラ
イシタット區に於ける傳來の家産ノイデツクに赴
いた、其所には元とハノーエル第十六軍團第二龍
騎兵聯隊の少佐たりし兄(?)が臨終まで住んで居
た。リーゼンゲビルゲ山中のシユライベルハウに
もよく旅行して妻の妹(?)と結婚した義弟(?)フ
オン、マンシタイン閣下を訪問した。

毎年夏ボムメルンのカムミーン附近なるグロー
スユスチーンと云ふ所有地に女婿を訪問して暫く
滞在した。爰で老紳士に田園生活の物靜な樂みに
耽り、又屢々喜んで近所の東海岸(バルチック海
岸)に遊んだ。

一九一四年七月三十日切迫せる戦局の報道を得

たのも此所であつた。得々たる意氣と勝利の確信
ごとに満ちて彼は此忘るべからざる日の重大なる電
報を鶉呑にした。此時世界の運命は一髮に懸つて
居たが、其一髮は斷絶したのである。けれども彼
は今や司令權を要求する資格が無い。是れ彼を深
く悲ましむる所以である。彼の時世は既に過去つ
た。彼は時代後れの人である、若き人材が祖國防
禦の爲めに繰出さなければならぬ。

然し斯る時節に方りて悠悠田舎に止まるに忍び
ない。彼は直にハノーエルに赴き、萬一御召の聲
が彼にも懸つた場合手近に居ることにした翌七月
三十一日汽車は運轉停止となつたから、彼は最後
の瞬間に歸宅した譯だ。

爰で熱烈なる注意を以て事件の進行を追究し、
地圖の上に東普侵入露軍の進路を記入し、彼にし
て東北邊境防備の任に當りたらんには、如何なる
手段を執りたるべきか、其日其日の自信ある方略

を立てた。

八月廿一日從僕が電報を齎した時も、餘念なく地圖に見入て居た。電報を開いて見ると、皇帝陛下は彼を元帥に任命し、復職と同時に司令權を授けらるゝことゝなつた。

此時の彼の感情は想像に餘あり、且忽ち十年若返つたことも理會せられる。間もなく第二の電報が届いて、夕方に臨時列車が彼を東部戰場へ運び、同列車内で彼の參謀長ルウデンドルフと落合ふ事にならうと云ふ報知を受けた時、彼の精力は更に十年若返つたに相違ない。是は八月二十二日の夕方であつた。五日後にタンネンベルグの戦闘が始まりヘンデンベルグを全戦役を通じて獨逸將星の第一列に進め、彼の名を不朽ならしめた。

二

黄昏に我々は司令部に歸着して、八時少し前私は軍司令官の居る別荘に赴いた。別荘は往來から

鐵柵で限られ、庭の入口の上には小凱旋門の如く卵形の表札に「誠意歡迎」の文字が讀まれた。

客間には幕僚と當日の來賓とが集まり、最後にルウデンドルフ中將が見えた。人々は三々五々相別れて談話を交へて居る。正八時になると隣室に元帥の重々しい齊然たる足音が聞えて堂たる豊満強壯の姿が鬪の上に現はれる。私が今更此眞面目な、凜々しい、嚴格な相貌を描寫しようと思ふる必要はない。此愁はしげながら親みある眼、引締まつた口、突立つた白髪、濃くクツキリと弓形に垂れた髭、此風貌は如何なる獨逸人にも瑞典人にも知られて居る。此名士の前に立つた時、私はトイトーブルグ森林中の古代ゲルマン人を想はざるを得なかつた。彼の事業は彼等のその如く永遠に活きるであらう。其は此事業が國民の意識に超人的として直に銘じられ、國民の愛情は此英雄を今既に傳説の微光を以て包み罩めたからである。

實際ヒンデンブルグは古代ゲルマン族長系の酋裔で彼自身族長である。さればと云て一つ／＼の相好が異常で、非凡な性質を露はして居ると云ふ譯でもない。タンネンベルグの戦勝者が獨逸の百姓だつたら、其風采は何人にも目立たなからう。此百姓は非常に強壯な、男らしい、真正直な人相だと云ふ位で、六十八年の生涯に多く働き、深く思ひに沈んだ人だと推する位だらう。骨格と大きな頭、此男自体が彼の何物であり、何人であるかを語つて居る。即ち莫斯科の蒸汽ローラ(修道轆)を破壊し、皇帝と軍隊とが彼を据わた持場で、引續き獨逸の敵を全滅せしむる大將軍であることを斯して私は彼を始めて見た、安心と頼もしさの權化で、泰然自若の氣を周圍に漲らせる彼を。私は戦争に於ける人格の力、軍將が集團を統治する力を幾分理會した。クラウゼキッツが主將たるに必須の性質に就いて下の如く云てるのを我家で讀した。

んだことがある、曰く「彼の胸中の火、彼の精神の光に囚りて、すべて他の人々の決意の火と希望の光とが新に焚付けられなくてはならぬ」と。爰に強き心を他に分ち得る人が立つて居た。時を経て後今に至り彼時の深き印象が復活し、ヒンデンブルグに關する記事を讀む時、戦争哲學者の他の金言を思出す。曰く「強き心とは單に強き感動の能あるものではない、最強き感動に遇ひて平均を失はず、胸中の嵐にも拘はらず洞察と確信との餘裕あること、猶嵐に揉まるゝ船の上で羅針の運轉自由自在なるが如きものでなくてはならぬ」と。

室内はヒツソリとなり、人々皆直立不動の姿勢を取つた。元帥は神色自若たるもので、私に握手して入口に掲げた誠意歡迎を繰返した時も、前と同じく眞面目であつた。それから他の來賓に挨拶し、幕僚に軽く會釋して、我々一同を食堂に案内した。

來賓は泡立つ三鞭酒の盃を舉げて歓迎せられ、一同上機嫌で、談話は酒類料理品と同じくはづんだ。英國の兵糧攻めは爰には跡形もない。完全な上品な晚餐として申分はなかつた。最後に珈琲、リキユウ酒、葉巻、紙巻及蠟燭の火（莨を吸付ける爲の）が行届いた兵士の手で配られた。其他の點に於て軍司令官の別荘ではすべて質素勝である。別荘も小さし部屋も狭い。元帥は今日の廿四人以上の客に食卓で接することは出来まい。然し彼は彼の住宅、町内、否全市を戦利品を以て飾ることが出来たらう。所が戦勝記念品などは跡形も見わぬ。室内に漲る戦勝の氣分は亭主役から溢れ出たのである。彼は東普から露國の侵略を終局的に掃蕩した。マズール湖上に最早露西亞嵐は吹來るまじ、「心安かれ我祖國」。今は攻勢に轉じて戦を敵國に遷すことが出来る………

元帥は西部戰場に於ける印象に就いて二三の間

を掛け、東部戰場に於て私の期待の當が外れることは萬あるまいと心丈夫なことを云はれた。彼は大元帥たるカイゼルのことを語り、老後に及んで斯の如き君主に事へ得ることを難有く感じて居た。祖國の危急を強慾な大敵から救つたと云ふことは、彼に取りて必無限の喜悅と満足との源泉であらうと云たら、簡單に、謙遜に「それあ博士（！）軍人だつて運の向いて來る事もなくてはね！」と答へた。彼の大勝利に對し彼は先第一にお助を授けた神に、それから東部に於て彼に重大なる任務を負はせた皇帝に、次に必要缺くべからざる慧眼の參謀長ルウデンドルフに、また優秀なる將校團に、最後に併し最小ではなく彼の勇敢なる兵士に成功の名譽を歸した。彼自身は顯達をも榮譽をも要求しては居ない。全獨逸國民の心と永遠の感謝とを握つて居ることは内心の喜びであらうが、之を鼻に懸けることはしない。彼は彼によりて祖

國に附與せられた赫々たる光輝に對し、感謝の念を懷き、神と人とに對しては何處までも謙遜である。

朝鮮慶州邑城に就て

文學士 小 田 省 吾

慶州は朝鮮の名邑なり。探勝の羈客常に跡を絶たず。然るに其の邑城の築造年代は東國輿地勝覽、東京雜記、増補文獻備考何れも之を載せざるなり。

高麗史を按ずるに、兵志城堡の條に曰く、

顯宗三年城慶州長州金壤

と。蓋し慶州築城の史に見ゆる最初なるべし。長州は今咸南定平郡の一部にして、金壤は今江原道通川なり。尙同書を按ずるに、地理志東京留守の條に、

顯宗三年廢留守官、降爲慶州防禦使

とあり。始め新羅國除かるゝや高麗は其の國都を

以て慶州となし、之に大都督府を置きしが、成宗の六年改めて東京留守とせり。是に至り留守官を廢して防禦使を置きしかば、始めて築城の必要を感じたるものなるべし。

次に舊奎章閣(今朝鮮總督府參事官室分室)所藏の慶尙道續撰地理志を閱するに、

府邑城 石築周廻四千七十五尺高十二尺七才

有軍倉、洪武戊午改築、

とあり、之に依りて始めて改築の年代を知ることを得たり。洪武戊午は即ち高麗末期辛禡王の四年にして、顯宗三年を去ること三百六十六年なり。

抑々慶尙道地理志並に慶尙道續撰地理志に付て